

花鳥風月・短歌

本殿にわが奉納歌飾られし

六度目の春年男なり

徳永 誠一

昔から一眼二足三手と

よく云はれたり大事に感謝

加藤 イサ子

礼所参りやつと結願長い旅

さあ高野山へ一步踏み出す

佐伯 定則

米袋抱え届きし中身菊

仏前供えおすそ分けり

小林 泰子

雲流る今朝の空色絵の如し

気高く聳え四国山脈

塗塀
良子

雄大な石鎚山の初雪が

朝日を浴びて光り輝く

一色
ノブ

卒寿の「菊名人や」菊花展

紅白の幕はなやぎ咲きて

石井
トシ子

麦ふみのできる喜び共に生き

ねあげの年に共に働く

かさこそと音たてながら枯れてゆく

白連のつぼみ大きく見ゆ

曾我部
福石

久々の道後の湯へとゆっくりと

浸かる夫婦の旅へと感謝

うちぬきの水に我が身を映しつつ

歩めば楽し西条の町

小田和子

皆既月食地球の影は薄いねと

夜空を眺め妻のため息

釣竿のぴくりともせず小春風温き

コンクリートの岸に貼り付く

小田慶喜